大学生のスポーツ活動と意識生活に関する調査研究

身体教育学コース　澤　井　和　彦

Research study of Sports and Lifestyle in university students

Kazuhiko SAWAI

The purpose of this study is to research the variety of sport activity and sport image among the students in University of Tokyo, and to investigate its semantics in their lifestyle. We categorized the students to four types by the club that they belonged, such as, 1) students who belong to the official sport club of university, 2) students who belong to unofficial sport club of university, 3) students who belong to non-sport club and 4) students who do not belong to any clubs. As the result, we could find that each category possibly related to the different pattern of their sport image, lifestyle and gender, which meant that sport was variously imaged, accepted and used by students as the resource of their person systems.

目　　次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　方法
Ⅲ　結果と分析
　A　クラブ・サークルへの参加率
　B　運動・スポーツへの取り組み
　C　生活実態
　D　意識調査
　　1　運動・スポーツ観
　　2　意識とライフスタイル
Ⅲ　考察　―大学生におけるスポーツ受容の多様性とその意味するもの―

Ⅰ　はじめに

一般に大学におけるスポーツは，福利厚生や教育の一環として，大学の学生課や，あるいはいわゆる「体育会」や「学友会」といった準大学組織によって資源やサービスの配分が決定され，秩序形成されている[1)]。こうした組織的な資源配分と秩序形成は，地域スポーツや企業スポーツ，学校スポーツなど，わが国におけるスポーツ活動(システム)の多くの領域に共通するメカニズムである。

これらは近代過渡期におけるスポーツの普及においてはある程度有意味であったかもしれない。ある一定の水準のスポーツ活動をできるだけ広く普及することは，経営学で言うところの大規模生産・大規模販売に相当するであろうし，その場合の組織による垂直的統合の効率性は明らかだからだ[2)]

しかし，経済活動であればその効果は製品が売れたか売れないかによって自動的に確認できるが，スポーツの組織的・計画的な資源配分において，その効果がきちんと確認されてきたわけではない。たとえば海老原[3)]は，統計的データから「擬似スポーツ参加者」および「疑似スポーツ参加希望者」を区別し，果たして組織的・計画的な財やサービスの配分は適切であったのかどうか，あるいはスポーツが健全な形で受容されてきたのかどうか，注意を促している。組織的なスポーツ活動の普及，すなわちスポーツ活動(システム)における計画的な秩序形成と資源配分は，その理念やミッションについての議論が先行するなか，客観的・科学的な検証や議論が十分になされてきていないように思われる。

そして現代社会は高度消費社会であり，近代成熟期[4)]を迎えたともいわれて久しい。人々の価値観・ライフスタイルは多様化しており，画一的な財・サービスの市場における限界は原理的には明らかであり，かつ不可逆でもある。もはや特権的な理念やミッションのあり得なさが際立つなか，組織的・制度的に配分され，秩序形成されてきたスポーツ活動(システム)の意味の再検討とその効果の確認が必要と思われる。

本研究では，一大学内という限られたフィールド内

の研究であり予備的ではあるが，大学生のスポーツ活動をクラブ・サークルへの所属によってカテゴリー化して把握し，生活実態や意識，ライフスタイルと関連づけてその意味を検討することを試みる。大学生にとって，こうしたクラブ・サークルへの参加は社会生活における重要な位置を占め，準拠集団として機能することも珍しくない。そのようにスポーツ活動＝部分システムを他の部分システム(帰属集団，意識・ライフスタイル)と関連づけ，相対的に位置づけて把握するのでなければ，スポーツ活動に対する計画的な「操作」の意味や効果，さらには是非をも問い得ないと思われるからである。

II　方法

東京大学本郷キャンパスの学部学生(3，4年生)を対象に郵送法による質問紙調査を行った。

・期間；2000年3月～4月
・対象；東京大学本郷キャンパスに通う学部3，4年生(駒場キャンパスに通う教養学部生は除く)から無作為抽出された1468サンプル(全体の6分の1)
・調査項目；性別，スポーツ活動(クラブ・サークルへの加入状況，運動・スポーツ実施状況，スポーツ歴)，生活実態(自由時間の過ごし方，学外での活動，持ち物，利用しているサービス)，および意識調査(スポーツ観，ライフスタイル，消費性向，社会心理学的尺度)

意識調査における質問項目は，運動・スポーツ観やライフスタイル[6]，消費性向[7),8),9),10]，あるいは自意識，セルフモニタリング(SM)，承認欲求，自尊心，独自性といったさまざまな社会心理学的変数[11),12),13),14),15),16]から119の質問項目を選出して作成し，「当てはまる＝4」「やや当てはまる＝3」「やや当てはまらない＝2」「当てはまらない＝1」の4段階のリッカート尺度により評価した。

III　結果と分析

A　クラブ・サークルへの参加率

回収数は665，回収率は45.3%であった。サンプルにおける男女比は男性78.2%，女子21.8%であり，本郷キャンパス全体の男女比(男子；82.2%，女子；17.8%)よりもやや女子の回答が多い傾向が見られた。また，クラブへの所属状況をみると「運動部員」が17.3%を占めるが，実際に東京大学運動会において確認される運動部員数は11%[17]であり偏りがみられた。したがって，運動部員の割合を11%に補正して各クラブ・サークルへの所属割合を算出した(図1)。運動部員11%に対し，スポーツ系サークル所属者は31%であり，運動部以外にも非常に多くの学生が運動部とは異なる形でスポーツ活動にコミットしていることがわかった。

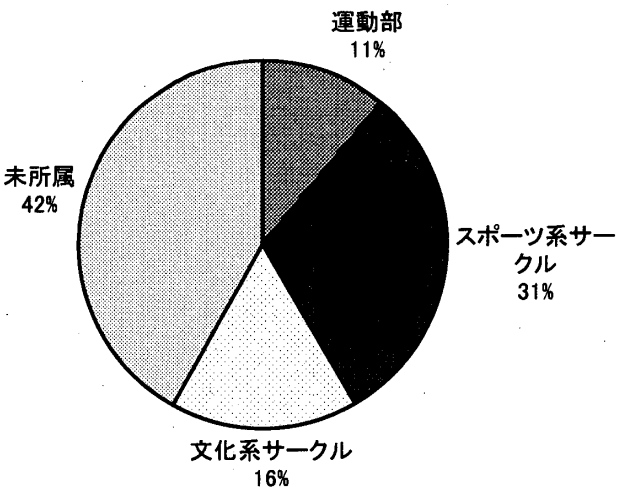

図1　クラブ・サークルへの参加率

これ以降の分析は「クラブ・サークルへの所属」により，サンプルを「運動部男子」「運動部女子」「スポーツ系サークル男子」「スポーツ系サークル女子」「文化系サークル男子」「文化系サークル女子」「未所属男子」「未所属女子」の8つの「クラブ・サークル所属カテゴリー(以下，所属カテゴリー)」に分類し，名義尺度のものはクロス集計と$\chi 2$乗検定を，またリッカート尺度のものはTukey法による多重比較を行った。有意水準は10%に設定した。これは各カテゴリーとスポーツ活動，意識調査等との相対的な関係構造に焦点を当てるものであることから，すべてのサンプルを分析に用いることとした。

B　運動・スポーツへの取り組み

「運動・スポーツへの取り組み」は所属カテゴリーによって有意な差がみられた(表1；$p<0.05$)。

C　生活実態

表2に，所属カテゴリーと生活実態の項目で，有意

表 1　スポーツへの取り組み

	運動部男子	運動部女子	スポーツ系サークル男子	スポーツ系サークル女子	文化系サークル男子	文化系サークル女子	未所属男子	未所属女子
度数(人)	95	18	154	32	73	28	188	64
運動・スポーツをおこなっている	74.7	75.0	74.1	46.9	11.0	17.9	20.7	20.0
おこないたいと思うがなかなかできない	25.3	20.0	25.3	53.1	71.2	78.6	67.4	72.3
特に運動・スポーツに関心はない	0.0	5.0	0.6	0.0	17.8	3.6	11.9	7.7

※下線部は調整済み残差 2 以上。P<0.01

表 2　所属カテゴリーと生活実態

	運動部		スポーツ系サークル		文化系サークル		未所属	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
度数	95	18	154	32	73	28	188	64
自由時間の過ごし方								
テレビを見る		+	+			−		
コンサートやライブによく行く	−	−			+	+		+
映画を観る	−	−	−	+	−		−	
本を読む(マンガ以外)	−	−	−	+		+		+
マンガを読む				−	+	+		−
テレビゲームをする	+	−	+	−			+	−
コンピュータが趣味である	+	−	+		+		+	
友達同士で遊ぶ				+	−	+		
合コンする			+	−		−		−
バレエなどの舞台や劇を見に行く	−		−	+		+	−	
旅行に行く	−			−			−	
ドライブに行く	−		+	+	−	−		
釣りやキャンプなどアウトドアで遊ぶ		−	+					
会場にスポーツを見に行く		−	+		−	−		
テレビでスポーツを見る	+		+			−	+	
上記以外によく行う趣味や娯楽がある		−		+	+			
学外活動								
定期的なアルバイト以外の学外活動			−			+		+
持ち物								
家庭用ゲーム機			+	−		−	+	−
携帯電話			+				−	
インターネットショッピング	−					+		
メーリングリスト	−		+				−	

表 3　所属カテゴリーとスポーツ観因子

運動・スポーツ観因子	運動部		スポーツ系サークル		文化系サークル		未所属	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
スポーツ志向因子		−	＋		−	−		
コミュニケーション志向因子			＋		−			
健康志向因子	＋	＋			−	−	−	
勝利志向因子	＋					−		−

差のみられた項目について示す。「学外活動」「持ち物／利用しているサービス」については，調整済み残差が 2 以上を「＋」，－2 以下を「－」で表記してある。「自由時間の過ごし方」については，Tuley 法による多重比較による等質サブグループの数値が高い方(すなわち「当てはまる」)から，「＋」，「未表記」，「－」と相対的に表記した。これらの表記は所属カテゴリー間の相対的な関係を示すものであり，絶対数とは無関係である点に注意されたい。

D　意識調査

意識調査を所属カテゴリー間で多重比較したところ，119項目中50項目で有意差がみられた。これらの関係を要約して記述するために，有意差のみられた項目について因子分析(主因子法，バリマックス回転)を行い，各サンプルに割り当てられた因子得点を変数として所属カテゴリーとの関係を記述した。

このとき，「運動・スポーツ観」に関する質問項目のほとんどで有意差がみられたが，これは所属カテゴリーの性格から自明のことであるので，「運動・スポーツ観」とそれ以外の意識調査項目(意識・ライフスタイル)を分けてそれぞれ因子分析を行った。

1　運動・スポーツ観

「運動・スポーツ観」について，所属カテゴリー間で有意差のみられた16項目について因子分析を行った。回転後の累積寄与率は39.6で 4 つの因子が抽出された。それぞれ「スポーツ志向」(運動やスポーツは得意なほうだ，学校の体育の授業が好きだった，運動やスポーツをするのが好きだ)，「コミュニケーション志向」(運動やスポーツではみんなと仲良くやることが大切だと思う，運動やスポーツは楽しむことが大切だと思う，運動やスポーツで新しい友人ができたり，友人とのコミュニケーションが上手くいったりする)，「健康志向」(自分は人よりも体力があると思う，自分は人よりも健康であると思う)，「勝利志向」(運動やスポーツはその暴力的な激しさが魅力であると思う，運動やスポーツでは勝ち負けにこだわるべきだと思う)と名づけた。

所属カテゴリーに与えられた各因子の因子得点によって多重比較し，Tukey 法による多重比較によってカテゴリー間の相対的な位置関係をみた(表 3 ；Tuley 法による多重比較による等質サブグループの数値が高い方(すなわち「当てはまる」)から，「＋」，「未表記」，「－」と相対的に表記した。)。

2　意識とライフスタイル

意識調査項目中，所属カテゴリー間で有意差のみられた50項目のうち，「運動・スポーツ観」を除く32項目で因子分析(主因子法，バリマックス回転)を行った(2 項目は共通性が低いことから除外)。累積寄与率は39.9%で11の因子が抽出された。それぞれ「ミーハー因子」(自分を表現する手段としてファッションを重視している，ファッションのためにお金や時間をかけてもおしくない，自分はおしゃれだと思う，流行を気にするほうだ)，「異性交遊因子」(異性との交流が多い方だ，異性と気楽に話せる，まわりと比べると，自分は異性と付き合った経験が豊富な方だ)，「個性派因子」(自分は個性的な生き方をしていると思う，自分は平均的な日本人とはちょっと違う生活をしている)，「スポーツ志向因子」(疲れやストレスをスポーツで解消させる，好きでよくするスポーツや趣味がある)，「おおらか因子」(将来のことよりも今の生活を大事にしたい，機能やデザインがほとんど同じなら，ニセモノでもかまわないじゃないかと思う，経済的に恵まれなくても，気ままに楽しく暮らせればよいと思う)，「自信家因子」

表4　所属カテゴリーと意識・ライフスタイル因子

意識・ライフスタイル因子	運動部		スポーツ系サークル		文化系サークル		未所属	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
ミーハー因子（流行やファッションを重視する）				+	−			+
異性交遊因子（異性間コミュニケーションに慣れている）	−	+			−	+	−	+
スポーツ志向（スポーツが好きだ）			+		−	−	−	−
おおらか因子（現状を肯定しあまりこだわらない）	+	+	+					−
自信家因子（自分の体型に自信あり）	+			−		−		−
社交性因子（友人の数は多いほどよい）			+		+			−
自意識因子（自分は変わった）	+	+	+	+	+	−	+	+
信仰性因子（超越的存在に弱い）				−	+			
知識志向因子（知ったかぶりするのが好き）	+	−	+	+	+	+	+	
ブルジョア因子（経済的に豊かで食事にこだわり）		+					−	+

（実は自分の体型にはけっこう自信がある，何をしてもたいていの人と同じ程度にはうまくできる），「社交性因子」（友人の数は多いほどよいと思う），「自己主張因子」（高校時代と比べて「自分は変わった」と思う，人と意見が対立したとき，絶対にゆずれないと思うことがある，まだ自分の能力を十分に発揮していないと思う），「信仰性因子」（自分にとって「死」はこわいことである，今自分が所属している大学に誇りを持っている，「神だのみ」をすることがある），「知識志向因子」（話題になる映画や本について，よく人に話したり教えたりする，「物知り」のほうだ），「ブルジョア因子」（自分は経済的には恵まれているほうだ，食べるものには大変こるほうである），と名づけた（表4）。

「スポーツ観」と同様に，所属カテゴリーに与えられた各因子の因子得点によって多重比較を行い，カテゴリー間の相対的な位置関係を表4に示す。

III　考察　―大学生におけるスポーツ受容の多様性とその意味するもの―

以上のような大学生のクラブ・サークル所属のカテゴリーについて，生活実態，意識，ライフスタイルと関連付けてそれぞれの意味を考察してみよう。

まず，男子の運動部とスポーツ系サークルにおいては，それぞれのスポーツ観に差がみられた。運動部男子は「健康・体力」「勝利」といった対価に，スポーツ系サークル男子は「楽しさ」や「コミュニケーション」といった対価にそれぞれコミットする傾向がある。同時に，両者の意識やライフスタイルにも差がみられ，運動部男子が異性とのコミュニケーションを苦手とする一方（表4），スポーツ系サークル男子は「携帯電話」や「メーリングリスト」「合コン」（表2）といった項目にも示されるように，異性との関係に限らず社交的な側面を持つ。運動部男子が自身の体型や体力・健康への関心を強く示しており，運動部への参加について自己意識，自尊感情との関連が示唆される一方，スポーツ系サークル男子ではそうした傾向はあまりみられず，テレビやライブでのスポーツ観戦など，生活を楽しむツールとして多様な仕方でスポーツを享受している。

一方で，文化系サークル男子はスポーツに関して比較的ネガティブなイメージを持っている。本研究の項目の範囲では，文化系サークル男子と未所属男子の間に生活実態や意識・ライフスタイルにおいて大きな差はみられないことから，文化系サークルへの帰属とスポーツへの距離の取り方が相関している可能性が示唆される。

以上のようにみてくると，運動部，スポーツ系サークル，文化系サークルの男子にとっては，スポーツがある程度の明確なイメージを与えられており，そのうえでクラブ・サークルへの帰属や生活，あるいは意識やライフスタイルの中に，多様な仕方で戦略的に位置づけられている可能性が示唆される。

一方，女子では，スポーツに対する意識とクラブ・サークルへの参加の関係が男子よりも不明確な傾向がみられる（表3）。文化系サークル女子は相対的に否定的なスポーツ観を示しているが，運動部女子は「健康

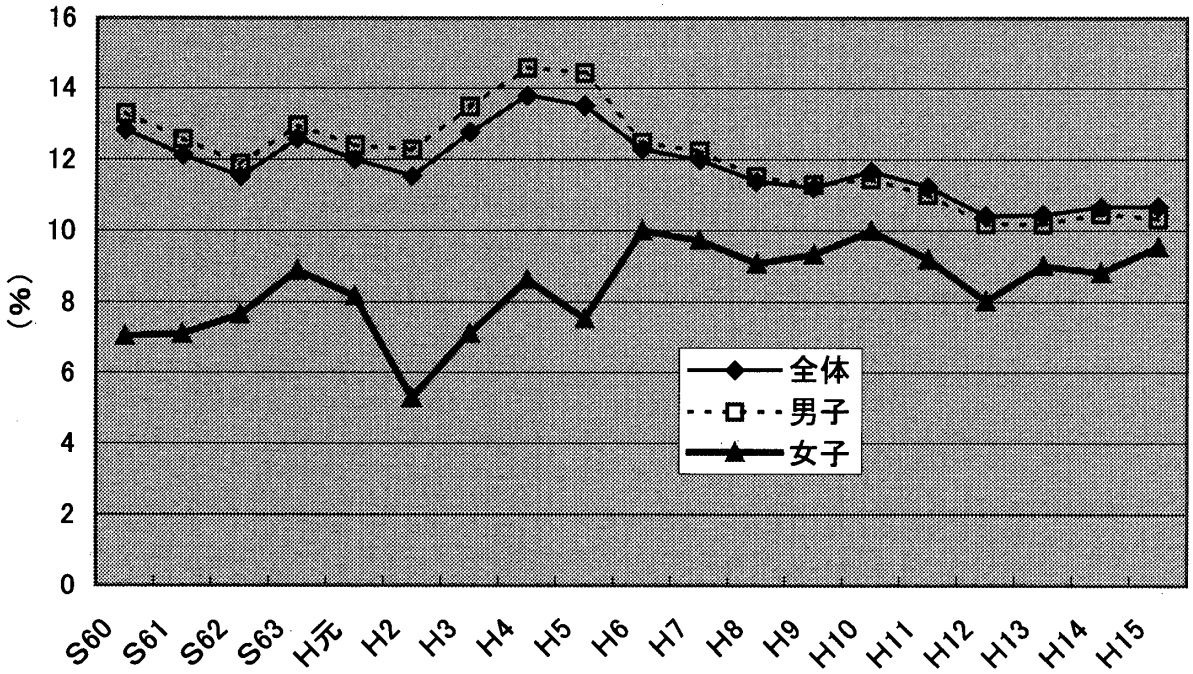

図 2　東京大学運動会運動部員の割合の推移 19)

志向」を示す一方で，逆に「スポーツ志向」は女子の中でも最も低く，スポーツ観戦にも特に興味はない(表2)というアンビバレンツを示す。

一方で運動部女子は，意識・ライフスタイルにおいて「おおらか因子」が高く「知識志向因子」が最も低いといった他のカテゴリーの女子とは異なる傾向を示す(表4)。したがって，必ずしもスポーツに対する明確なイメージによる戦略というわけではないが，彼女らの意識やライフスタイルにおいて，スポーツ(というより運動部)が一定の機能を果たしている可能性が示唆される。

スポーツにおけるジェンダーについては様々な議論があり，大学スポーツについても組織的・制度的に潜在するジェンダーが指摘されている[18]。そうした中，東京大学における女子の運動部員はここ数年増加傾向にあり(図2)，彼女らの意識・ライフスタイルとその社会的な背景との関係については興味深いテーマである。

一方，「スポーツ系サークル女子」にはスポーツ観に特徴が見られないが，実態としてはマネージャーとしての参加などもあり，その取り組みをみても(表1)実際にはスポーツ活動を行っていない場合が多いと考えられる。流行やファッションに強い関心を示す一方，異性交遊にはさほど慣れているというわけではない(表4)という一見してアンビバレンツを示す彼女らにとって，スポーツはミーハーな関心を満たすとともに，ちょうどよい社交の場として機能しているのかもしれない。

これに対して，未所属の女子は異性とのコミュニケーションに慣れている一方で社交性因子がすべてのカテゴリー中でもっとも低い。ミーハー度が高い一方でスポーツ志向やおおらか因子が低く，異性だけでなく同性とも付き合わなければならないクラブ・サークルへの参加にはあまり動機づけられていないということかもしれない。

以上の記述は，「クラブ・サークル所属カテゴリー」という一つの「観察の視点」からみたものであり，これらとは異なったカテゴリー化や観察の視点はいくらでもありうる。特に，未所属の男女については単に大学におけるクラブ・サークルへの所属によるカテゴリー化によってその中のすべてを上記のような記述で代表できるわけではもちろんない。他のカテゴリーにしても，さらに細かいサブカテゴリーを想定することは可能であるし，またそうすべきであろう。あるいは，クラブ・サークル所属カテゴリーとは異なるカテゴリーの視点から多元的に検討することにも意味があるだろう。今後の課題としたい。

本研究では，さしあたり大学のクラブ・サークル所属の観点からその活動の一端を統計的に把握するとともに，スポーツ活動が，さまざまな生活実態と意識・

ライフスタイルに関連付けられ，多様に意味づけられて受容されていることを示した。

現在の大学の制度下では，運動・スポーツにおける資源やサポートは全学生の約1割程度の運動部員を中心に配分され，秩序形成されている。これは組織的・制度的に，あるいは歴史的にもまったく正当ではあるが，本研究でみてきたような学生の意識やライフスタイルの多様性と，多様なスポーツの受容可能性に鑑みれば，画一的な資源配分や秩序形成の仕組みについて再検討していく必要があるように思われる。

註

1)東京大学においても「東京大学運動会」が「運動部」を統括するとともに，各運動部から選出された常務を中心に事務局(総務部)を構成し，大学学生課の指導の下に各種スポーツイベントの企画・運営や大学施設の一部運営を行っている。こうした組織的(制度的)正統性を基盤として各運動部には大学スポーツ施設の一定の専用利用が認められており，また全学生から徴収した会費から予算が支出されている。

2)今井賢一・金子郁容『ネットワーク組織論』岩波書店 1988 p.26
3)海老原修『スポーツの社会学 スポーツの広がり～スポーツ人口構造～』 杏林書院 1998，p.12-43
4)宮台真司『これが答えだ！』飛島新社 1999 p.154-155
5)二クラス・ルーマン『社会システム理論・上』恒星社厚生閣 1997 p.167-176
6)原田宗彦・菊池秀夫 1990 スポーツ参加者のライフスタイルに関する研究 体育学研究 35 241-251
7)飽戸弘『消費行動の社会心理学』福村出版 1999
8)日経産業消費研究所『日経ライフスタイルシリーズ5 都市生活者(先端消費者)とライフスタイル 報告書』日本経済新聞社 1988
9)日経産業消費研究所『日経ライフスタイルシリーズ4 「知」「遊」とライフスタイル 報告書』日本経済新聞社 1991
10)宮代真司 1987 現代大学生の消費生活の意味するもの―意識調査をもとにして― 社会心理学評論 6 25-46
11)末永俊郎編『社会心理学研究入門』東京大学出版会 1987
12)岡本浩一 1985 独自性欲求の個人差測定に関する基礎的研究 心理学研究 5(3) 160-166
13)岩淵千明・田中国夫・中里浩明 1982 セルフモニタリング尺度に関する研究 心理学研究 53(1) 54-57
14)菅原健介 1984 自意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み 心理学研究 55(3) 184-188
15)吉田道雄・白樫三四郎 1975 成功―失敗条件および成員の統制志向傾向が成員行動の認知におよぼす効果 実験社会心理学研究 15 45-55
16)根本橘夫 1972 対人認知におよぼす Self-Esteem の影響(1) 実験社会心理学研究 12 68-77
17)東京大学運動会 『運動会報』1999より算出
18)澤井和彦 2003 「スポーツとジェンダーのパラドクス 女性選手のスポーツ参加について～N.ルーマンの社会システム理論による把握～」『現代スポーツ社会学序論』杏林書院
19)東京大学運動会運動部員数については『東京大学運動会 運動会報』1985～2002 より算出。東京大学全学生数については『学内広報 5月1日付け号』1985～2002 による。